

会員の広場



ギリシャのワイン、ギリシャのコイン

夏目敏夫（東京）

夕陽のスンニ岬、エーゲ海は赤金色に輝いていた。この色が「海の色に染まる、ギリシャのワイン」と、今は昔「桃色吐息」の一節を思い出させた。パイロンや多くの旅人たちが感嘆した地である。

照明に浮くパンテノン神殿は美しいデロスの造形、日中、そこから眺めるアテネの白い街並みは箱庭的だが、その地下には今も世界的な遺産が豊かに眠る。マ

トンや海鮮料理を、水代わりのギリシャワインで味わう。30年前までは世界8位のワイン生産量だったのに、今や国内需要を満たす程度である。とはいえ、バックカス神で知られ、古代はアゴラでワインを飲み交わし、哲学、科学を論じ民主主義の理念を醸した。

その末裔たちは時の厳しい流れにさらされて、財政危機に直面している。かつては、世界上位の海運国でオナシスほかの船主長者を輩出し、かつ多くの海員が活躍する時代もあった。その後の海運界の変貌の中で、税金対策の便宜置籍船の潮流に抗せず、資本・資産が海外に流出してギリシャの国家歳入は激減した。一方これという産業もなく、輸出品はビスタチオと海綿のみと揶揄される始末となった。ただ一途に観光資源依存体質となっていく。

ギリシャ文明は欧州文明の根源であり、欧州人にとって尊敬と精神的拠り所である。英王室のフィリップ殿下も旧ギリシャ王家の係累といわれる。イートン校

ほかの名門カレッジではラテン語とともにギリシャ語は必須科目であった。この素地が、都市国家群の神話叙事詩の解説・解明に進み、世界文化に大きく影響した。これを手掛かりに、シュリーマンほかの人々が古代発掘の扉を開くことになった。近代のギリシャ人は、

英国が一時、宗主国であった関係もあってギリシャ系英国人も多い。米国には著名なギリシャ系の啓蒙家が多数いるし、評論家・ジャーナリストとして活躍するものも少なくない。これはアゴラでのDNAが発揮されているのではなからうか。

さて、エーゲ海の小島巡りも一興である。トロイアを訪ね、トルコ側から回遊する。猫だらけの島、クルマやバイクが禁止されロバが交通機関の島、芸術家のアトリエが立ち並ぶ島……。それらの島々の局印が押された絵葉書はいずれも美しく受け取った人に喜ばれる。東寄りのクレタ島へは空路で、そこは消えたアトランティスかと思わせる異文化の匂いがする。ここで

アニスの香り「ウズ」（ギリシャのブランドデー）に酔いしれぬうちにこの国の経済危機を再考してみよう。

ここにギリシャ・コインがある。私のお宝である。BC4世紀の古銭・ドラクマ銀貨。シラクサ王国のデカ貨といわれ、王のプロフィールが古代ギリシャ史を語っている。この国は、通貨文明でも他のEU諸国とは比較ならぬ先進国である。物々交換でなく通貨流通経済が行われていた、その頃、今のEUの欧州人はまだ「黒い森」で獣物を狩る原始経済であったのだ。

今、この国の危機はECBの支援もあって小康状態にある。しかし、流出した資本・資産持ちのギリシャ人は帰ってこない。最近のEUでも加盟国間での資産逃避が問題化して当事国間の財政危機の原因となっている。一国の財政を揺るがす事態は企業の多国籍化、個人資産の過度の流出と考えられる。ギリシャ危機はわが財政に照らして、対岸の火事と軽視するな、手中のコインはそう問いかけてきた。